

## インドネシアのハウステンボス



長崎のハウステンボス

本国にはない街並みなのである。少々大げさにいえば、異国の地ゆえに実現した世界に一つしかない街並みということになる。

インドネシアの首都ジャカルタにも、ハウステンボスと似た街並みがある。旧都心コタ地区に入り港の方へ向かうと、運河沿いに古い洋館が建ち並び一画に行き当たる。かつてのオランダによる植民地支配の名残りである。この地には、かつてジャカトラと呼ばれる小集落があったが、18世紀に入ってオランダ東インド会社の基地となり、やがてオランダの植民地支配の拠点都市として発展し、バタフィア（バタヴィア）と呼ばれるようになる。ちなみにジャカトラの名は、ジャガタライモがなまったといわれるジャガイモとして日本語に痕跡をとどめている。

バタフィアは、その土地に住む人々とは異なる民族の手によってつくられた典型的な植民都市であった。18世紀につくられた版画には、運河が縦横に走るアムステルダムを思わせる都市が描かれている。そこにあるのは、まぎれもないオランダの風貌をもつ都市である。異なった気候風土に、別の都市文化と文明を持ち込む。生物にたとえると外来種ということになるだろう。

出発点ではオランダ都市の引き写しであったバタフィアは、次第に本国には存在しない都市へと変貌を遂げていく。その後継であるジャカルタになると、もはや別種の都市といってよいほどに姿を変えてしまった。都市文化にはハイブリッドであることを物語る特徴が畳み込まれているが、まだ少し残っているバタフィアの面影は次第に薄れていきつつある。そんな中で、コタ地区の街並みは、都市ジャカルタの歴史を象徴する文化遺産として保存が図られている。現存する最も古い建物は18世紀に遡るといわれるから、当時長崎の出島に来たオランダ人が眺めた可能性がないとはいえない。

ハウステンボスの街並みの中には、17世紀に建てられたアムステルダムにあるオランダ連合東インド会社の本社がある。バタフィアはこの会社の基地だったから、ジャカルタ・コタ地区もこの会社がつくったようなものだ。2つの街並みは、実はつながっていたということか。

(自然・環境マネジメント研究部 田原 直樹)



ジャカルタの旧都心コタ

ハウステンボス。よく知られた、長崎県佐世保市にある、オランダの街並みを再現してつくられたテーマパークである。オフィシャル・ホームページを見ると、「17世紀オランダの町並みをそっくり再現した、超ユニークな街。建物一つひとつのモデルが、本国オランダに存在しているのです」とある。まさにオランダの街そのものだが、モデルとなった建物はオランダ各地に点在しており、この街は実在する街の再現ではないことに注意する必要がある。ハウステンボスは、オランダ

## もう一つの小林コレクション

— 進化を続ける「小林文夫コレクション」 —

人と自然の博物館は設立準備室時代から、多くの方々から貴重な標本の寄贈を受けてきました。それらは系統的に整理・保管・活用され、数あるコレクションのなかの一部は3階入り口の「ナチュラリストの幻郷」で常時展示されています。この展示コーナーで一際異彩を放っているのが鳥類標本を主体とする「小林コレクション」です。

ここでは、もう一つの「小林コレクション」、「小林文夫コレクション」を紹介します。このコレクションは古生代後期と中生代の有孔虫化石を含む石灰岩の岩石薄片20,000枚以上から成り、母岩や岩石チップとともに地学系収蔵庫に保管されています。

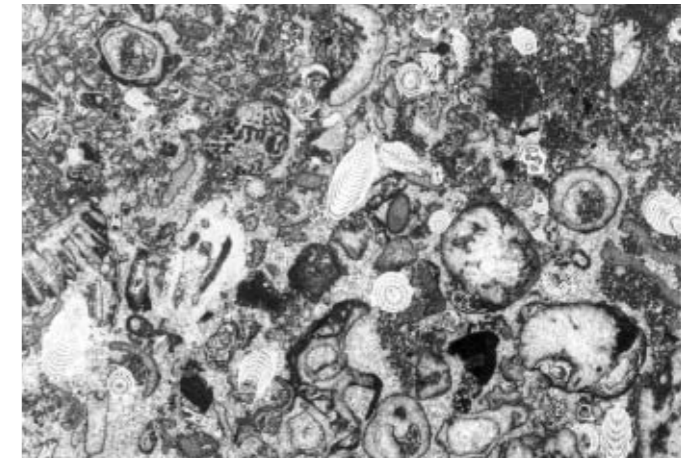
それは公に博物館研究員の名の付いた唯一のコレクションであるほか、私が元気なうちは量・質ともに今後も増殖を続ける(進化する)という点でこれまでに寄贈を受けたコレクションとは異なっています。

「小林文夫コレクション」には、いつ・どこで・どんな研究をし、論文化されたかという、今日に至る私の40年近い研究歴が潜んでいます。フズリナ(古生代後期の代表的な有孔虫)化石の定方向断面の現れた良質な薄片製作には高度の技術と経験を要します。石灰岩の切断からカバーガラスの固定に至る一連の作業は、一枚の薄片につき平均1時間を要します。単純計算すると、24時間不眠・不休で2年4ヶ月間、私が薄片作りに没頭していたこととなります。

研究者個人の製作による20,000枚という岩石薄片枚数はおそらく世界1で、コレクションの質の面でも他を圧倒していると自負しています。同一サンプル内の定方向の有孔虫化石断面でも個体差が多く、フォーナの多様性を論じるには、石灰岩相とともに、サンプルごとにすべての分類群の有孔虫化石の組成を明らかにしなければなりません。個体変異とフォーナの把握を追い求めてきた結果が無意識のうちに20,000枚の薄片につながったと思っています。

有孔虫化石図版が載っている私の論文には、開館以来、「All specimens illustrated in this paper are kept in the Museum of Nature and Human Activities of Hyogo, Japan」と明記され、最近ではその語尾に「(Fumio Kobayashi Collection)」が付記されています。昨年、ジュネーブ大学の研究者3名が人博に4日間滞在し、「小林文夫コレクション」の鏡下観察により、彼女らとアジアの三畳紀有孔虫化石相を議論しました。3年前には、ノースアイオワ大学の研究者から石灰岩登録標本の一部譲渡依頼に応じました。このように「小林文夫コレクション」は国際的な研究活動を通して、兵庫県立人と自然の博物館の名を世界各地に発信しています。

(自然・環境評価研究部 小林文夫)



「小林文夫コレクション」の一例、含有孔虫化石石灰岩(関東山地の最上部ペルム系)の顕微鏡写真。

### 編集後記：

企画展「見逃すな！はてなのせかい」について今回特集しました。編集している私も、はてな？となるくらい不思議な企画です。お見逃しなく。この企画展とは対照的に、本号の後半は一見すると地味ですが、味わい深い記事を3つ掲載しました。町並みに対する中堅と若手研究者二人からの異なった視点、そしてもうひとつの小林コレクションの意外な中身です。このように多彩なところがひとくちの良さとお見逃ししております。

(シンクタンク事業室 三枝春生)

ハーモニーのバックナンバーは博物館のホームページ  
<http://hitohaku.jp/publications/main.html>でご覧いただけます。

人と自然の博物館ニュース  
「ハーモニー」No.51

平成17年10月10日  
兵庫県立人と自然の博物館  
〒669-1546 三田市弥生が丘6丁目  
TEL (079) 559-2001(代表)  
FAX (079) 559-2007

博物館ではインターネット上でも情報を提供しています。  
URL <http://hitohaku.jp/>